大和國筒井清水　巻之一

濱松哥國著
浅山芦國画

檀勘左衛門誠忠傳

此まきのとくハ
磐井射術

へ 13
3175
1

文化十四年丁丑初春

濵松歌國著
浅山芦國画

新板讀本

大和國筒井清水

全部六册

[illegible]書林
河内屋嘉[illegible]梓

ヘ13
3175
1-6

へ 13
3175
1

昭和九年
九月二九日
早稲田大学図書

早稲田大学図書

筒井清水巻之一

松倉真治郎

明石郷助
高取玄蕃

大和國筒井清水總目次

一冊目の巻の名ハ　繋井　射術

二冊目の巻の名ハ　春興　音曲

三冊目の巻の名ハ　老狐　夜嵐

四冊目の巻の名ハ　古畫　青樓

五冊目の巻の名ハ　密書　經文

六冊目の巻の名ハ　良夜　藤浪

通計十二回

大和國筒井清水巻之一

浪花　濱松歌國　編集

一回　岩井

夫筒井氏ハ天兒屋命の御苗裔にして仁皇四十八代稱德帝神護景雲二年戊申冬十一月九日に天兒屋命河内國枚岡より大和國添上郡三笠山の頂に遷らせ給ふときに相從ひ奉る藤原姓四家より其一人天兒屋命に給仕なし添上郡筒井の庄に住す。故に世々氏として其名ハ筒井太夫藤原順武といふ。是筒井氏の始祖なり。夫より四十三代の嫡孫順永律師法印筒井の庄におゐて城築をはじむ。

時は人皇百三代後花園院永享二年。春二月上旬より同十月下旬に其功なる。順永が人となり。寛仁大度にして麾下を懐け。商農慈をむねとし。領地も近郷に越え麾下日月にますます。大和国中大かたを取扱して。世の噂へもきこへし国主なり。かくて。筒井の城郭全く成就の后。家臣左門友保。麾下十市。陶山。澤。芳埜等を引連て。城中へ移りける。大厦高楼甍をならべ。掠門高く聳え立ぞその結構はいふもおろかなり。大庭宴の庭前に。いつの頃よりありけるにや。岩組積たる古井あり。順永これを好み。近臣に向ひ宣ひやう。這井は近世のものにあらず。当時は岩井といひてかくのごとく。岩を積重てなせる由へ。

まことびげの岩組あるとむかしをおもひあはせて多年をしたひおもひける事と伝る歌もあり。まつ奈良の京のころほひ。在五中将なりひら時の紀有常が女と。井筒によそしかけて互に歌をかはしてあそびけるよし。伊勢物語の双紙にのせてよく人の知る所なり。その時代にはいまだ木もなければ。井筒とはいつることなり。何は兎もあれ懐旧の心ある岩井なれば。やがて井のうちを。華なからんこと命ぜられしかば。近隣をとくあつると也ならずとみへど。石垣もむかしまさればず細いあるまじと小石に細引を付てたろしてみるともおほくあるやうをもへ。程もなくとおらさめさせんと。

つ井久永
檀妙たろう

足軽を呼よせ大竹の長持をおろさせ。足軽一人。その樽に
結ひて落しかば暫して上りきたると侍ども竹の先を
なしおまり遅れ出て上へ手をかけても見るに答なし。是はと
人〻不審なれやられて又一人縄にて結ひ入りるが井の内より
縄よしくとらへ声もきこえぬ。傍は縄をおろせよとの事ならんとて。
以前のごとく。不審とくりて縄と手速おろしけるが。其のち
音なし。時に順承公とはじめ近臣等。
晴ず。体内の様子方を呼て。おろしの中をかくらいうれ不審
子細ぞかゞ出るるなん。仍ならぬかりやと問ふおとども。
誰か答ふる者なかりしが日雇の中より一人の男すゝみ出て

いへ出る先刻井のうちへ入たる二人ハ定めて即死致
せしならん。総てかゝる古井にハ下より燃の如く毒気
昇る由へ直さま入れバ其毒に息をとめらるゝがゆゑ死す
るとか傳へ去ふまつて先上よりあるとひさしと留て蝋燭
小火燃とりし井のうちへ卸たれバ毒気深くまで忽地その火
消るなり毒気去りてハ底まで火とぼるゝ由へ其時を合図
として入りの形りとなり及べバ只今直さま入れ縄のうち人まづ火
をとりし御覧あるべしとて其言通り一理あるへが不意井のうちへ
蝋燭を入させたるに中途にて消しが此通りにハへが中々唯今
ハ入縄しるしてある縄を手捕て二三度へて手づからやがて灯扣

足をとりて下さぐしとらふ人くへ是非両人が即死ハ不便なれ
ども今ハ是非なし。兎角かの男が指図に任すべしと、
此時待合せたる者ども、まことおとこへさしづせしバ、供の輩
縄をとりかけるに、やうやうしと水際よりいそがしく氣づかひ
あるまじけれど、殊更にも今日中に沈まんとするを、はじめて
ころされけるが、今此時又合せべしと、再三捕の水
をのぞみより細引二筋を用意して、井のうちへのぞかせ
まし物のてやいうかちらんと、井の辺をとり巻き
源吾ちがひの見物しるべく、彼男と下水の為引を指
出して、是を我よりて下知なきを西へ大勢にて引上げ。

後に入る足軽の死骸濡鼠のごとく、なかなか浮あがりて
上りけるまゝ、一筋の細引を更に下しけれバ、初に入し足軽の
死骸なりしかバ、頼永公ハ足軽の死骸よりも外に何事も
とせよと命じ給ひ、備又かの日雇の男をとく足軽に召抱へ
らるべき旨、御沙汰ありて、井の水の支配役付られし御褒美を給ひ
日毎に水を替へ手て、急がず出し清水をすくひ、いつしか空に
湧出けれバ、頼永大ひに歓喜ましまし、此池筒井の底を
いつの代へも先祖頼武より此末氏が筒井と呼びし
今国築し城中に、かゝる清水あるも家門の栄利とて
古跡となるべしとて、這井を筒井の清水と称して。

筒井ハつゝゐの庭の清水に掬び手をきよめ庭の面なる
と一首の和歌を詠じのびやかに歎じて茶湯に日をおくられける。
却説今回足利の扶持人となりし日雇の男といつはるハ原越前
の國司朝倉右衛門督義景の家臣擅勘左衛門と呼し
武人なりしかども家臣の讒言によつて浪人の身となり。
一人の老母に孝養をつくさんためなれどもおもハぬ二君に仕
へんとて去りし越前の地より都をさして登り室町家の
諸侯の内にして何れか名家ならんと心合するに大和國
筒井家ハ其昔文武の名家にて家法ハ他國の鑑もなる
ぬるよしを聞とひとへに母諸とも此地へ来り縁をもとめて

仕官せんものとして南都の旅籠に老母を残し置て。
日毎に筒井の庄へまゐりしが其比ハ城郭の普請なる中にて。
人足多く入用なれども京末仁西涼き順永に農民を人
足に出さるゝ由。頼ミ日雇が従僕となりてと
勘左衛門ハ両刀を母に預け普請の土砂竹木を運び通
左官等が指図に随ひ日雇の中に交りし処不計も岩井の
者の手柄より足軽となりし由へ旅宿の母と共に筒井の城
中に住居なし擅勘左衛門と名を改めし。青雲の頃
来しバ先祖の名を恥かしめざる心どの家をもおこさんと日
夜出精して勤仕をするとハいへども。かゝる下さまの身なれ

中〻相公の御目にとゞまるべきも稀なりとて熟〻思案を巡
らし、秘密よりて射術の家にして、年来手練の顛末を
記し、停宮なる所へ開陳せんと、先その一紙を明山御助まして
指出し、執次を頼みなりし、この御助といふハ筒井家にあつ
て射術の英名をあらハし、おしなべて藩中の師範たりしが
殊にあづかりて大芳なりし、然るに新左衛門今回指出せし
秘書を披見せる処に、弓術の抜群して、ごく射芸の骨法
を記し、実に手練の注目あり、視るとも奥旨を極
達人と抗草しや比肩と欲筆なし、家なる手練猶る
時ハ京来ぬくの主君なる由へ、新左衛門栽衛を立

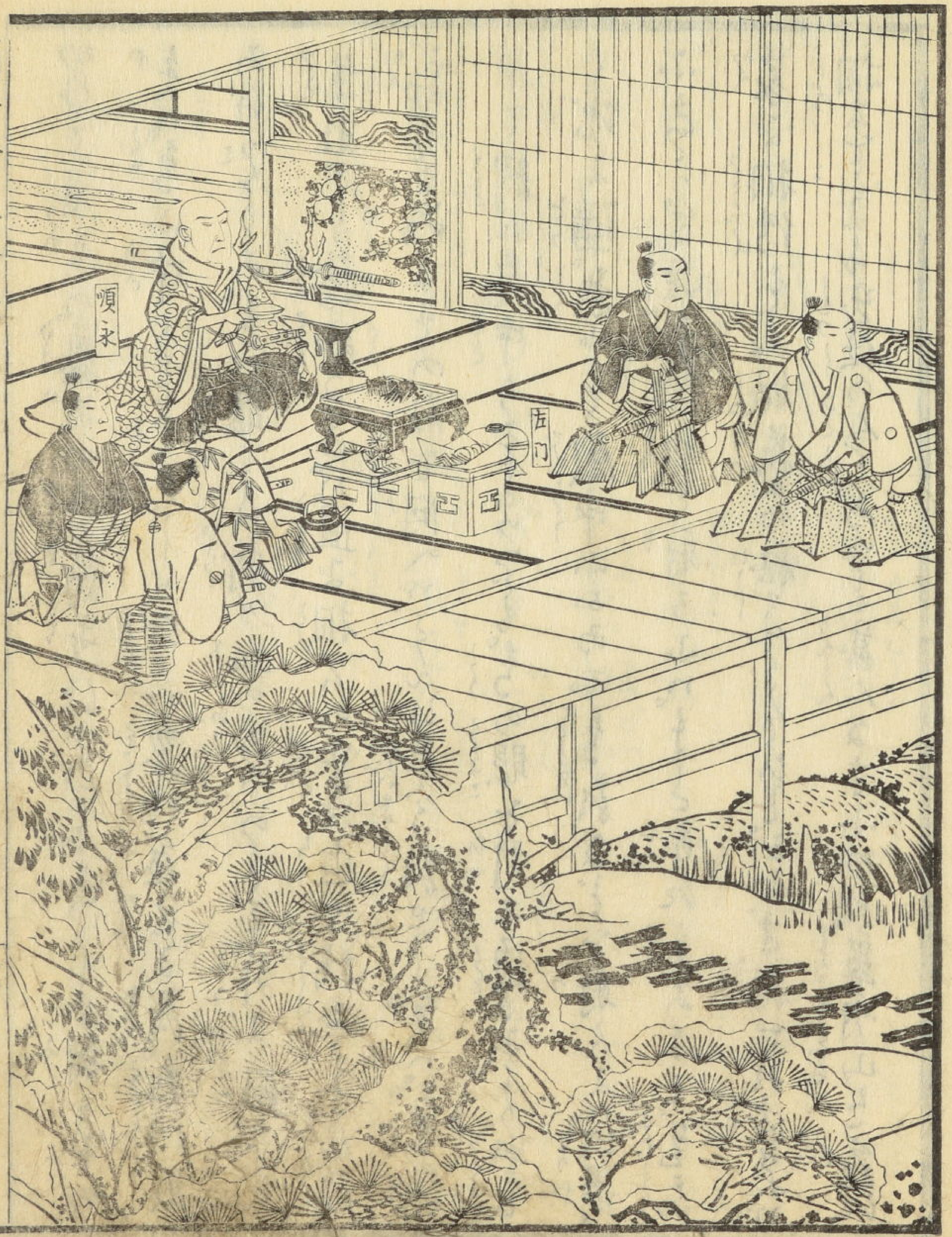
あるハ筆実なりしたあるハ楽に威勢を奪ハるゝなりやと、
卑劣の小人ともへ深く偏執を懐し、擅ゞ秘書をさし
出しに、弁様重て一向に執次なさゞれ、新左衛門ハ紛しを
知らず、左右と今やくと待ほどに、九半年の日数を
経ども何の子細もあらざれバ、毋猪とも不審くおもひて、
密く容子を問合せるに、我秘書ハ寝て御藩中の停
宮く席中へ披露なさず拵たしうなりて、猪ハ明山御助
射術の家として、藩中の教導と宗旨せらるゝほどもあるが
手練とあらハさバ、其身の妨となるらんこと、他と妬心を
と思ひしかりしか明山が胸中を後にみて、なるがごとし

とるしるべとも。千万なく後まで日をとゞめしなる。

二回　射術

三笠山の富景とは筒井の城中よりの眺望ありしを。
看雪の楼と名づけしも十二月中旬の夜雪おびたゞしく
降積りて満庭さながら銀紙布るが如くなれば。深更ま
およびて筒井順永公は近習竈須賀をまでて楼上にのぼり雲の
絶間を照す月影に三笠山の白雪を詠めたまひ。酒宴閑に
及ぶなら。遠明方もせくなき。ある旅人などの往来
と御覧あれば。笠よりも雲気の月をさしかけ。朱ハ不審れ
花を折れば山人の雲ならうて景色しや光源氏の常陸の

宮にとまりせし咲の庭の雪もたてるや。花待右のごろ
ゆうしふ積るもはうしと。獨ことちにふ打うし。雪ふまかぶふ
白鷺一羽。庭前の樹木の蔭より飛去るを。順永公呪と
見て。富士のうらに明山はおしざるか。あれ射とめよと仰ごと
あれば。かしこまりぬれと。明山郷助おどり出弓と矢つがひ
ねらひを定めつゝく放せば南無三宝。その名たるうまか
行跡。口明山が赤面は。とび貝にくけ雪の朝にかより速く
筒井左門忠位を披露して出まうり。此躰なるよりも擅ひ
なさやと呼ばは。跡左遠へ走り出。剣くまにかえとちをる
左門尉て。飛行白鷺をやく射とれと下知をまとば畏られと


順永
左門

かくて用意の蟇目の弓箭手にとりてひやうと射るその
矢は鳥に中るとみえしが鷺は忽地庭上に落左門殿
あげ見れば眼より纔か血の出るのみにて外に疵なく
生ながら擒になれば直に相公の御座近く差出し左門
勘左衛門にその故を問へば然んは只今殺せし矢は鷹の羽
にて鏃は白へ中らずとも鷺の眼を引て通るにより血を
て地に随ひて殿中におゐて殺れなどと射んには此箭
にあらず怪鳥の目を射るにはまことに矢ありて是等
家に相伝せる射芸の秘なりてひとおぼえず怪せんと述ければ
相公をはじめ出仕の人々おのづと感ずるほどに奥州山ら座に

たまらず立んとせしを左門押とゞめ勘左衛門義只惜に
御抱ありし后射術を以て御奉公いたしたれば評定所へ
訴訟せんと貴殿まで願書をもつて差出せし処
あまりの今日にいたるまで某が射芸の試をもなさざれば然ひの
願とも披露あらざるはいかなる一存にや不審ながら夫がまに
其職を勤ざる由へ藩中の風説は先達てかくとのみでも其拵
著しが弓箭術は邪正明らけく室中の鷺を射るに貴殿
のねらひは大きに違ひ勘左衛門が射留し手練をもつて武芸
に長じたるは只今の羽のうらに顕然なれども某が鍛錬
と云ふ御意殿より帰参まで時は武道の本意ぞ

おのづから理なるらん。以後ハ互に奥の変をなし、必ず眼
にかゝることなく、昔よりかゝる武芸の争ひが双傷に及ぶ。
備るゝ術をしらざるにせば、其の心をすて忠義を励ますべし。
流石ハ簡井家の長臣にて一家の為をすと其足峯の義を
御助にまうせしが、明山も心中の憤さへ止みといへども左門
が指図も辞えがたく、宥恕に帰して檀が短慮をたしなめ、
桐谷へ角と挨拶させぞするに命じて読せける。素来
競争の当日朝倉義家が家臣にて数代射芸の名誉ある
よし、道一の師しられ弓術ハ師範にも優れありし事なれバ、
直に五百石の御墨付なし下され、万事に相調へける

雲太夫も推挙師付られ、雪丸の席の御墨までを
下されしが、時の面目身におまりぞなく、其役がらの長家
に移りし母の歓ばしもたとへんかたなく、藩中の若侍もこれまで
明山に従ひて射芸の稽古をなせしが、御助が未熟なるを
知りてや世言の嵐が増ひくゆゑ、浮き／＼雲太夫門が
門弟となり、弓術を励みて義孝の法正しく、日ならずして
其ところの多くあるによりて、猶も櫃氏をそろ殺して今も
明山の門人一人もなく、眼前の盛衰は東山に昇る旭の影と
西の海に沈む月にて異ならねば、御助ハいよ／＼恥辱を重
ぬるを忿り、雲太夫と簡井ふして這意恨を晴しおはん

立退とも無が親族とてハ老たる母一人なきバ傍に
天の栽ざるもごし聖人の糟粕て掌で手を歎かうぞねる
者もあるまじかぬ勘左衛門今ふおもひ納らせんと時節を窺ひ
待居ける檀勘左衛門ハ角とも知らバ常時推度の事なれバ
日毎の出勤に遅なし一日主用にてよろく律南備山に到り
帰陣ハ是非とも夜陰に及ぶべかりし城江助官とひそしく
是究竟の時をこまりと密かに弓矢城携さへ勘左衛門
を射留なバ直さる国をして身を全くせんと路狼を机に
付らし非義の往態ふ看為に紛るにまかてるし陣内を出て律
南山の這方なる律南備の森とふる茂林の中に身を忍び

檀造しと待ねだるに宵月の影も西に傾くころ檀勘左衛門ハ主
一人の奴僕に挑灯もたせ道ぶるどりて律南備の森の辺と
行る折ざるかよしと郷助かまへて放す弦音彼利く人を
守る勘左衛門身をかいして飛来矢を丁と払ひし奏の
秘術ハ末に稽智の丈夫まよ由べ一箭に射らましし苦痛の躰
見るより奴僕ハ周章さる、仕済しつりと郷助ハ後を暗し
逃去んとなす路を窺ひ時分ハよしと奴僕ハざさハ紙割しとめ
挑灯是へと火を移して件の箭をかとくと更め何心の中に
うち点頭挑灯やまと懐ろ深に納るこそ不敵なれ肩井の
陣中に帰り山郷助叔代の主家をとて上帝なせしか

欲めて擅に勘左衛門に卿等をかくしと恥辱におよびけり固より
あるべし去ながら曩祖より高恩を蒙りし主君へは
恨も忘ずして国家を殺戮言語道断の曲者なりとて某を
はくのう佞奸を逃げよと所存なりしのみなまだ勘左衛門今は
昔日の容をも思ひださく。神南侍の表のうちより某が除
路を急ぐ挑灯の火影を目当に射かけし箭は鈴木山
郷助に相違はなくとも渠は譜代の忠臣の義に若じ
新参にして戦場の功もなきを紛なまが行なるも穏便に
お済せられ召連たる奴僕も悉く只ひとり付添しかど
郷助は倅にさず忠義に及べとは我すら志も免し今

是非なし。君の御憤りはおそれ多くぞんじ奉り候へ
ども。何卒渠が詮議の儀は隠慝をもつて。宥めらるりせに
なし。此役義某に仰付らるまじ下さらば。郷助が在家彼
探り求め。吉と義例を加へて忠義を励む壮士と任ぜ給
なほ恐ましは。ごあいさき先祖の旧功に免じおんびん
の御ひらき頼いしかれど。理非せめて言上す勘左衛門が
正路なる詞にはまりせ。今回の義は兎も角も。其内よと
命じ。君もをば臣も朋友の戸をとさぎず。寛を
害せんとせる。郷助が抗弁なるをれ。世も小癪ひるれ英雄し
かかる寛仁ある勘左衛門引換え。明山郷助は擅に一箭

小射当しとおもひをうけ其夜に山を越て河内へ身を退
き冨田林といふ在方に知音ありて爰に志づかに世を忍び。
筒井家の安危を余所ながら窺ひせんとおもひよりしに
檀勘左衛門が身命の継がれのこるあらず。日増に牢中に
尊敬に阿るよしと密かに大ひに驚きますますや百倍の
憤りを発し膝に手づくへせしとおもひのあふ存命とハ
心得ず。平君まゝぬ勘左衛門つくしと実否糺し風聞に
遠いずる存命ならバ程良ばかり巡らして急を救せん
と。其身ハ備国河内より忍び大和のかたと窺ひてみれば
心を砕きける。二説その頃京都より盗賊数十人の党を結

洛中に徘徊して。公家武家庶民のうちをなく悩まし狼藉
けるバ。足利武林義教公より厳しく令を下し給ひ。織業など
探を求むるとも更に知れず大坊の武士数く小路しくと
巡りを入れども。程静なるしが。剰へ室町なる秘蔵の紅塵を
いつう名香宝蔵にておましと。織業忍び入て奪ひ去れバ。
義教公大ひに怒り給ひ。諸士小いよいよ厳しく令を下し其と
そのうち土を穿て。探り索る。是らを入れとあく小言く盗賊と
行き当る者あらバ。黄金百枚褒美として。ますへべきよし沙汰して
洛中の縫勘夫うとなるらバ。庶民ハ盗賊を心と安んずる事なく
数月を経るとも。小職を出そ彼それまて。二人三人捕へるのみに

して。賊首更に知れざりしく。詮議さまざまなりしかども。その所
宗として武家の面々も僅に罪を負へる家は擅に動かし
は。宗家の命ありて上京なし。室町の御館への使者を勤めし。
帰国の時に至るまでは。何時も安んずべきにはあらざれども。盗賊徘徊すれ
横行して。庶民業を安んずることなし。武家の人々も。其の
発を止め得ざるを嘆くるに忍びず。彼由ありて賊首の名を
其罪は世に告しらさんため。笠置山の麓に隠れ住みしく
のなしを得るに不満家大いに喜び。か企てたる程に。
数十人を擁し。なほとやつさせ。人知らず賊首の家の四方を囲ませ
けり。賊首は深竹の辺に住く。二十年の書生なるが。平生家

にありて。終日書を讀誦して。夜も深更に及ぶまで
偶街と往来する人の知るもまれなり。其勤学に感ぜざるは
無し。いかなる人の子孫なるやと訝むのみにして。隠遁の志あるを
少しも怪しむ様がなかりしに。遠右衛門案内によりて。彼
書生が住家の前後より進み入りければ。書生は大に驚きて。傍
に差したる刀を抜きて立あがり。左右より挑むを組討何の
苦もなく投倒し。足を踊らして。裏なる高塀飛越んとす
賊るその光景恐るゝよりも。塀の彼方にも。速く数人の
組子控へ居れば。遁さず捕へんと働く。書生も力を極めて。斬
むすび勇猛なりしが。己に遁れ難きを時。

かけるぞと、かんしが安らし書生が刀を奪ひとらへ、組ふせ
けれバ、大勢打よりて、縄に縄をかけ、鳥山満家が館へ伴ひ
帰り来てその家内を穿るに、天井に家符ありて、黄金数
てかし箱を積重て床下に差置るまで、夥しく財宝を
蔵し置し利家の秘蔵なる、紅塵の香木もあり、これが拷
問に及ばれ織首せられし明白なれば、此よし義教公へ言上
して、香木を揃へ上奉りしかバ、武林の御喜悦浅からず。扨
余党もことごとく捕へさせ、六条河原にて梟首ありしかバ、
諸人皆安堵のおもひをなしけるが、武林義教公ハ擅勘
左衛門に同道を免され近く招かれしかバ、備後の守として

武門の冥加に叶ひし名誉、お目出たく感義堂にて列座
する諸侯の中を、徐歩にて御座近く平伏すれバ、義教公
寵しやう、帝代の織首都にもれ、深草の里に住むる紋
人皆悟らず、謙遜の者にてよく心付ざるを、其方筒井順
永が家来とあるとバ、大和国に住居の身まで兄弟せしはし
いかなるより覚を知りたるや。然ある事が幼き名を
とくしく改をあげ、今田順永が使として貴館へ推参住る
うち、宇治の里より帰るへ通るを見ざれ旅、一旅の風吹来かれ
えるけしめ番をありし方へ不定なし。其方をさして行深
草の里の民屋よりへ、紅塵の名香を備て其頃日

僉議厳しく盗賊のかゝるを必ず捕らんと心づくる其頃の容子
を窺ふに古人の説に宝貨を多く蔵むる者は尾土の霜き
いふて窺ひしとかや。彼書生が屋上をうかゞひしは人家より
高からん所へ行ても誰にも見られけんなれどその近隣の旅館に
やどりし奴僕にも知らさで朝夕とも窺ひきれば読書の
声絶ざると迷惑に思ひ来して衷るる様を見越出る其の
行末を見んと後に続て帰よりしが彼曲者ハ軒を走り
棟を踰ること強るの東北を走ることやゝ暫くに家を見失ひ
しかども紛ふ事なき名香の盗賊ならんと推量高山家へ
殿中まで注進せしがおりしも昔奈良の町に藤小三郎といふ

ありて其身軽く屋上より飛下る事さながら鳥のごとくなりし。
事及べど彼盗賊ハまだ捕らじとぞ答ける。
南坂南振の南四辻の屋敷に武林義教公擅勘左衛門とて
住ける浪人ありしが
名高き即智と勇ありて好んで剣術を学び武勇の名高きを
聞て勘左衛門の門に入りて学ぶ者多かりしが勘左衛門ハ
勝ともなく身を謙り五宗七囲と学ぶるまで之を兼
そへ武芸のみならず風雅文芸をも好み
順承が家来ほどありて優しき行状なりしとぞ。
また浪人を召して出仕させよとありしが病に託て貴人を辞し
すべて勘左衛門が身の上の事を窺ひ退きし。唯洛中の

騒動ありし後、及び諸人の笑ひを除かんがために斬首を
行せしるをバ、さらに褒賞をあたへしかど、小祿といへども
鷹永より鞭ありて武人の数に入る身の冥加と存じ、武林家
への寸忠にはとて、賞金を受納すべき覚えあらざれども、
一旦諸人に志あせし、法令にちがひてハ、是利家の政事に泥し
からざるに似たれども、固く辞む海が詞も一理あるをもて、賞
金を褒賞にはさんするハ無用なるべし。是とらせんと宣
ひ、然して継たる一ツの鞭を出し、近ごろ唐国より得へ
たりし宝鞭にして、秘蔵するといへども何の皮とも知れず、継
りのあるや否や、いまだ詳らかならねども、海が知る事もあらんや

とて鞭のありさまをバ、手にとりて押いたゞき、良が時細に絹して。
是ハこれ西域にたつる獣ありて、其を含て馬口に吐き
かけるをバ、馬瞑眩て死せんとを知へる馬ハ、よくこれを畏る。
名付けて馬見愁といふ。唐の宣宗の時、国人その皮を献ず。
帝群臣に賜ひ、偏く鞭に継る。一揚すれバ即ち走る事
飛がごとくにして止ず。不須鞭と謂し。米蘭雑志に
みえたりと答へるにぞ、多くその張紀博聞に称れし武林の
御賞賜斜ならざれバ、勤たる是も鞭とともに礼を謝し、
室町殿の御館を退き、大和路さして帰宅すれバ、筒井家に
ハ檀が文武の功あらはし、主家までの誉となりて頂戴

甚ど清兵を思ひ合せ。動元来のゞ轉役加増ありしかバいよう
感賀昌んにありし。富田林まで岡山郷助も寂ひ絶て。
今ハ容易なるゝ事ひがくくおりよ流け。狭南倫森まで
財ぞんどなる。不気杖又も悔されり。

筒井清水巻一終